〔研究余滴〕

農業集落寄合の議題についての一考察

― 農林業センサスの読み方に関連して ―

相　川　良　彦

1．はじめに
2．農業集落の役割について
3．結びにかえて

1．はじめに

1985年11～12月にかけて，市田（岩田）知子氏と共同で，全国の7農業集落を対象とした留置式アンケート調査を実施したことがある。山形2集落，宮城，群馬，滋賀，佐賀，鹿児島各1集落の世帯主を対象とした調査で，回収率70パーセント，268人から有効回答を得ることができた[1]。その中の調査項目の1つとして，農業集落の役割についての設問があった。本稿で紹介するのは，この設問の調査結果である。

2．農業集落の役割について

1980年世界農林業センサス「農業集落調査」は，農業集落の社会構造面について多様な項目を調べあげた画期的調査であった。その1つに，調査者側で用意した12カテゴリーの中から過去1年間に寄り合いで話し合われた議題を任意に選ばせる項目がある。全国の農業集落における議題取り上げ率の結果をみると，議題として飛び抜けて多いのが「祭り・盆踊り，運動会など集落の恒例行事の計画・推進」の90.8％，第2位「ごみ処理，上・下水道など生活環境施設の整備・改善」の46.0％，第3位「農道又は農業用排水路の維持・管理」の39.2％，第4位「集落としてもっている財産の管理・処分に関する協議」27.5％，第5位「水田利用再編対策の転作など目標面積配分・調整」25.9％，第6位「土地基盤整備など補助事業の計画・実施」の20.5％，第7位「農協・共済組合等の業務の協力」18.6％，等々となっている。仮に，最も普遍的な議題が最も大切なものを現わすと考えるならば，農業集落にとって「祭・行事の催し」が一番重要な事柄であることになる[2]。

だが，我々の農業集落についての見聞体験に照らして，「祭・行事の催し」を農業集落の最重要事とみなすのは実感にあわない。「祭・行事の催し」は，毎年議題にあがっても集落住民にとって現実的意味あいの軽い事柄のように感じられたからである。他方，断続的にしか議題にならなくとも，「基盤整備のための意思集約」は現代集落にとって大切な役割のように思えた。本設問調査の目的の1つは，それらの実感を地域をこえて確認することにある。目的の2つは，確かな事実のみを追求・確認しようとする農林業センサス調査が，その事実の重みの故に読み手を思わぬ錯覚に陥らせる危険性について示唆することである。事実の有無（及びその多少）と事実のもつ意味の軽重とは別問題であり，混同されてはならない，ということを集落の役割調査において例示しようというのである。これが当該調査項目を作成する際の問題意識で

あった。設問は次のようである。

問　集落が果している役割には，さまざまなものがあります。次にあげるなかであなたは何が大切だ，と考えておられますか（適当なものに幾つでも○印，その内主なもの１つに◎印をつける）

(イ) 土地基盤・生活施設・道路水路等の改善のため集落の意見をまとめ，外部機関との渉外にあたる

(ロ) 道ぶしん，草刈，溝さらえなどを行って，環境保全をはかる

(ハ) 集落の中での皆の意思疎通をはかり，互いに仲良く暮らしてゆくきまりや雰囲気をつくる

(ニ) 集落のお祭や諸行事をもよおす

(ホ) 役場や農協からの連絡を伝え，それらの仕事に協力する

(ヘ) その他

当該調査項目のカテゴリー作成にあたって，２点に注意を払った。１つは，カテゴリー数を極力絞ることである。各カテゴリーの軽重を判定させるという形の意識調査において，カテゴリー数は５～６ヶ程度が最適なように思われる。カテゴリー数削減にあたっては，当該調査対象集落の一部でしか議題にのぼらない項目，例えば「集落としてもっている財産の管理・処分に関する協議」，「水田利用再編対策の転作など目標面積配分・調整」を除外した。その他，全国ベースで出現頻度の少ない議題カテゴリーもみなカットした。他方，「ごみ処理，上・下水道など生活環境施設の整備・改善」や「水田利用再編対策の転作など目標面積配分・調整」の一部に含まれる「生活環境施設の整備」或いは「役場への協力」という側面は，拡張したカテゴリーである「基盤整備の意思集約」（設問（イ））或いは「役場・農協の伝達・協力」（設問（ホ））のなかに組み込んだ。

２つは，事実の確定を使命とする農林業センサスが設問カテゴリーを具体的な事柄に限定するのに対し，本調査では抽象的な設問カテゴリーを１つ，すなわち「意思疎通・和を図る」（設問（ハ））を付け加えた。現実社会には客観的に目で捉えられぬが大切な事柄，或いは具体的に業務化しているわけではないが重要な役割といったものが存在すると思われるからである。集落にとって，それが集落住民の「意思疎通・和を図る」ことではないか，と考えたのである。

図１は，当該調査結果を図示したものである。各カテゴリーの出現頻度の平均割合（百分率）は左端の棒グラフとして図示し，その内訳を属性別の折れ線グラフとして右側に図示している。グラフのうち，直線は世帯主によって最も重要と判定されたカテゴリーの総数に占める割合（％），点線は任意に選ばれた重要と思うカテゴリーの総数に占める割合（％），を各々に示している。

まず，任意に選ばれた重要度，最重要度ともに一番多いのが，「意思疎通・和を図る」（設問（ハ））であった。集落住民（世帯主）は目に見えず，具体的な事業でもないが，集落のもつ意思の疎通や意見調整の役割を重視しているのである。内訳で，39 歳以下の若年層にとくにその傾向の強かったのはやや意外であった。

「基盤整備の意思集約」（設問（イ））がついで重視されているカテゴリーである。具体的事柄として，住民は集落に農村の基盤整備の遂行とそのための意思集約の役割を一番期待している。仮に毎年議題にあがる項目でないにしても，基盤＝財産ストックの形成は農村住民にとって最大の関心事なのである。内訳では，経営規模の大きい農家世帯主ほど集落のこの役割を重視している傾向にある。

「役場・農協の伝達・協力」（設問（ホ）），「道普請等の環境保全」（設問（ロ））が第３位，第４位と続いている。前述の第１位，第２位の出現頻度割合に比べて，１ランク低水準にとどまっている，と言えよう。内訳では，

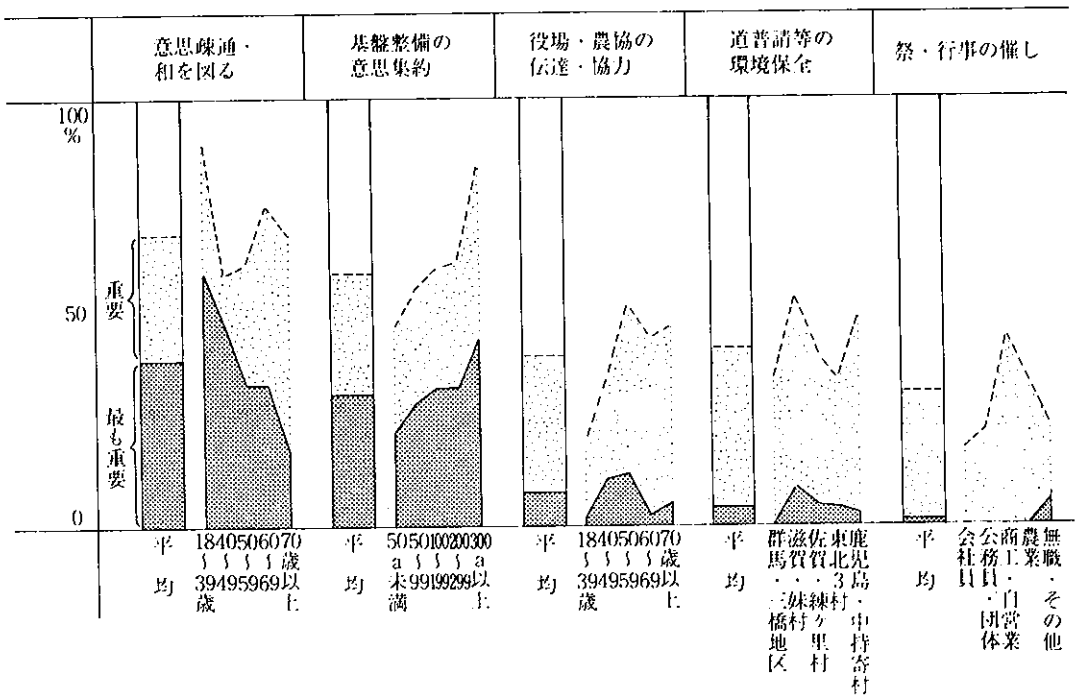

図1　集落寄合議題の重要度の評価

注．7農業集落の世帯主についての調査で，有効回答率70%，268人の集計結果である。

中高年層に「役場・農協の伝達・協力」を，都市近郊の水田地帯である滋賀県妹集落に「道普請等の環境保全」を重視する割合がやや高く出ている。

なお，「祭・行事の催し」（設問（ニ））の重視頻度割合は，予想通り低いものだった。特に，最も重要と回答した世帯主はごく僅かであった。いつでも，或いはどこの集落でも寄り合い議題にあげられる事柄が，必ずしも集落住民に大切だと意識されているわけではないのである。

3．結びにかえて

10年に1度の農林業センサスは，全国ベースのデータを収集する貴重な調査である。実態や資源賦存量の把握という国家的使命のもとに，客観的なもの，事実のみを調べあげるという実証的姿勢で貫かれている，とみてよいだろう。

だが，事実データを読むのは，意外と難しい。センサス・データなども難しいものの1つに挙げて良いだろう。理由の1つとして，事実の確かさを要求される公式統計が，客観的に目で捉えうる事実のみを調査するとき，個々のユーザー（読み手）は事実に引きづられ，物事の現象的理解にとどまる傾向をもつことがあげられる。

本稿は，農林業センサス「農業集落調査」の中の集落寄り合い議題を素材として，同調査における集落寄り合い議題の出現頻度という事実の読み方について，検討した。そこにおいて，農林業センサスデータは全国ベースの客観的事実の把握に遺憾なくその有効性を

発揮するが，事実がもつ軽重の意味あいについては別途意識調査で補足しなければ判断しがたいことを提示した。農林業センサス（公式統計）と個々のユーザーによる地域レベルの多様な調査との連携や交流が望まれるのである。

注(1) 本調査の概要については，拙稿「社会規範としての農民の家意識」(『農業総合研究』，第41巻第2号)，1987年を参照。

(2) 集落構造の研究において，集落寄合の議題からアプローチする方法は正統であり，優れたモノグラフ研究がこれまで幾つか出されている。余田博通『農村社会の論理構造』(弘文堂，1961)，高橋明善「部落構造展開の二類型」(『東大教養部社会科学紀要』第8号，1959)，拙稿「村落の社会構造とその活動の展開過程」(『農業経済研究』第59巻第3号，1988)，などである。そのなかで余田博通は「農作業及農業団体関係と水利及水利施設関係」が最多でないにもかかわらず，毎年恒常的に寄合議題に出てくることをもって最重要事と判定した。他方，相川は波動的ではあっても議題累計総数が最多である「基盤整備」を集落寄合の最重要事項と判定している。両者はデータの取り上げ方では共通するが，その読み方・根拠づけ方に違いがある。